

岩波
講座

日本文学史 第五卷 中世

平家物語と太平記

谷

宏

岩
波
書
店

平家物語と太平記

——軍記物語の展望——

谷

宏

平安朝の社会は、ごく大きくみると、一方では貴族を頂点とした富や文化や洗練された作法等々が光を放っており、この貴族の絶対的な優越の下で、諸階層はきびしく閉塞し分断させられていた。主要な歴史もほとんど京都および周辺の小領域を舞台にしており、この中心地帯はまた辺境と大きく隔絶していた。むろんそこには、この秩序像をはみ出してゆくものも、醗酵しはじめていた。十一世紀はじめから徐々に芽生えた新しい生産は、京都と地方との交流や諸階層間の接触を頻繁にする、それが、都の貴族の下僚層や市民たちのなかに、全国の、さまざまな階層の生活にたいする新鮮な開眼をもたらし、浪漫的な空想の世界や死んでからゆくあの世でなくこの現世的世界が限りない興味と量り難い不思議にみちているところだという現実主義的な考えを高めた。『今昔物語』の世俗部のような、断片的にもせよ、現実生活の驚きと不思議を全国に誇りさまざまな階層に亘って探採する説話叢林もうまれる、ということもあった。しかし全体としての平安朝社会は、最初にのべたようなものであった。

この平安朝的世界像は、院政期から十二世紀後半の内乱時代にわたって、特に治承・寿永の全国的な内乱（一一七七一八五）をとおして崩壊し消失してゆき、それと交叉しながら、かつてなく新しい広大な現実が、つくり出されることになった。

この内乱は、古代社会をたおそうとする無数の人びとのさまざまな生活的たたかいが燃りあわさった力の所産であった。この大きな力に押されて、旧貴族も武士も名主も新しい中世的土地所有者に転化しなければならずその覇権をめぐって激しく抗争しあわねばならなかった。この抗争に生き残るためには、諸個人諸集団は自己の意志と情熱をあげて行動し、姑息や隠蔽をかなぐり捨てて否応なく自己の個人的社会的本性を鮮明にうち出さねばならなかった。そ

こに、それぞれの個人、集団、階層がまさにそのものとして生き、人間がまさに人間として一切の閉塞と隠蔽から解かれて見える状況が出現した。そしてそれは死活的な内乱のなかのものであるから、激しい抗争のなかに見えてくる諸人物の姿それ自体は、当時の人間生があらわしうる限りの驚異と畏怖、美しさと穢なさ、強さと弱さの極限化せられた視像でありえた。このような驚くべき人間生を鮮明にうち出しながら、内乱は京都とその周辺だけでなく東国、北陸、四国、九州という全国的な舞台に展開し、旧貴族も武士も名主も平氏一門をめぐって公然と戦いあい、武士が凄まじい行動エネルギーを発揮しその前でかつて聳立していた貴族は圧倒せられ廟堂で榮華を極めた平氏も悉くほろばされるという事態がつくり出されていった。それは事実そのものの力によって、貴族が絶対的に優越し諸階層は閉塞し分断させられ歴史の舞台がほとんど京都に局限されていた平安朝世界が消え去ってゆき、それにとってかわるかつてない広大で新しい現実が誕生してきたことを、はっきりと告げ知らせるものであった。

このような治承・寿永の内乱は、永く古代社会の中心に住み平安朝世界像のなかに生き続けた京都およびその周辺の人びとにとって、はげしい衝撃事ではなければならなかった。事実、守覚法親王という皇族でさえ平氏のほろびに「盛衰昇沈の習」をみ「涙をそそぎ腸を断」ち義経を招いて合戦の模様を訊ねきくという行為に出ざるをえず『左記』、多くの公卿も平氏の記録を求めて転写しあい『玉葉』、慈鎮も貴族の時代はすぎ武士大將軍がひしと世を握る時運になったと観じた『愚管抄』。単に公卿たちだけではなかった。さきに、十一世紀ごろから既に現世生活にたいする新鮮な開眼と社会や人間のゆたかな可能性をこの地上の世の中で想像し感覚する傾向が大きく醗酵し『今昔物語』の所産もあったことを述べたが、この方向は、旧社会の解体と新しい生産が伸びた院政期から鎌倉時代に亘っていっそう発展していた。その成果を蔵しているものは、京都と周辺に限ってみれば、公家や武家の下級層、都市民、近隣の小領主たちであった。内乱はこの人びとの生活をも渦中に巻きこみその目に驚くべき事件と人間を見せ強烈な印象を残しながら、展開していった。かれらは、この内乱の諸事件諸人物に人間の世界と生の限らない興味と量りがたい不思議

議をみ、その現実的な想像と感覚をかき立てられてならなかったものであり、いちはやく、有王とか僧兵とかの「語り」にふかい感激をもって耳傾けていた。かれらは、自分たちが強烈な印象をあたえられた治承・寿永の諸事件諸人物にいつそう明確な表現をあたえてくれ、自分たちが個別的断片的にしか体験できなかった出来事の全体を知らせてくれる、内乱の語りの出現を待ち望んでいたのであった。

われわれが今日みる『平家物語』は、このような失望にこたえながら、治承・寿永の現実にあった人間生の驚異と畏怖、現世に生きる人間の美しさと穢なさ、強さと弱さの一切を語り、平氏一門の運命が集散的にあらわした人間社会のおそるべき悲劇を訴え、そのことによって、平安朝世界の閉塞をおし破ってうまれ出たこの新しい広大な現実がかくも限らない興味と測りがたい深い問題性に充ちておりそれだけに尽きぬ生き甲斐の場であることを鮮明な視像そのものによっておしえた叙事詩的な語りものである。その直接の作者は、原作を書いたと伝えられる信濃前司行長といい、以後その原作の原型をとどめぬまでに変化成長させた多数の第二次的な作者たちといい、みな下級貴族的な人びとだったと考えられ、そのいみで単なる民衆や聴衆一般には解消しがたい独自の存在であり、貴族社会で発達した個人意識その他その他の文化的蓄積の豊富な所持者だった。『平家物語』を創ったり成長させたりしたもの、そのような独自性に基く個性的なモチーフがあつたことだったに違いなく、特に原作のばあいはそのうであつたろう(この点は後述)。そうでありつつかれらは、いま述べたような内乱の驚くべくゆたかな人間生の明確で全体的な語りを待ち望んでいる広汎な人びとの存在を前提としそれにじかに語り訴えるという行為を創作の通路に入れていなくては、治承・寿永の内乱の物語をうむことはできなかったものであつて、行長も、自分の『平家物語』を叡山の盲目の生仏に教えて広い聴衆に語らせるものとして、書いていた。⁽²⁾思うに、内乱というかつてない事態の出現とそれが永く平安朝的世界のなかに生き続けてきた人びとに与えた強烈な衝撃は、文学者にたいして、ひたすら自己の心の内部や反現実の幻想世界で生の可能を追求してゆくかそれとも現実のなかから歴史と人間のおどろくべき意味や問題を新たに汲みあげ自

己を含む広い人間の全体に訴え語らずには済まなくなるか、この尖鋭に岐れる二つの道の選択をきびしく迫るそれほど圧倒的だったのであろう。西行(元永元年―建久元年
一一八二―一一九〇)や長明(久寿二年―建保四年
一一五五―一二二六)や『新古今』の歌人は前の道をえらんだ。後の道を選択した作者たちが、『平家物語』をうみ育てたのであった。

このことはしかし、『平家物語』の隅から隅までがそのまま完全に、民衆をも含む広汎な聴衆の「語りもの」だったということではない。この物語をきいて残らず理解できたものは、やはり貴族とか或る程度高い文化的芸術的洗練に達している限られた武家や都市民たちであつたろう。だがこの限定された人たちが『平家物語』を聴聞しその「語り」の世界に惹きこまれひたすらそこに生きているそのときは、かれらはさきにみたような、この物語のむつかしい語句の全部を理解できない人びとを含むところの、内乱の語りを待ち望みこの平安朝世界像の消失にとってかわって出現した新しい広大な現実の全体を知ろうとしていた広汎な民族を、じかに担い代表することになっていたのである。そのいみでこの物語は、独自の個性的作者とひろい享受層との合作物という本質的な一面をはじめからもつてうまれた。その性質は原作いごの複雑長期の変化と成長をとおしてますます強められた。それが、今日にみる『平家物語』である。このように『平家物語』は広い聴衆との合作のなかに生まれ育ったが、その聴衆は十一世紀いらい鎌倉時代に亘って現世生の有意味と社会と人間の可能性の現実的想像と感覚をたかめ続けた人たちであつた。かれらにとって内乱が感動的だったのは、まず何よりも、諸人物諸集団が激しく抗争しながら姑息と隠蔽から解かれて精一杯にその個人的社会的本性を鮮明にみせ当時において可能な限りの人間生の視像をうち出している現実の豊富そのものだった。それだから『平家物語』は、武士の活躍の謳歌だけ、平氏悉くの断絶の悲哀だけや、一個または少数の人物が如何に生きたかの終始と性格の全面の描出を目ざそうとはしない。それが語ろうとするのは、まず、平氏がその中で亡びてゆく治承・寿永のゆたかで広大な人間の世界、そこで互に葛藤し衝突しつつ自己の本性に生き人の世の面白さと悲しさの一切を見せる諸人物の姿の全体である。そのような造型世界を、平氏と諸他集団との衝突抗争がうみ出す「事件」を

主人公にすることによって、創り出してゆくのである。

たとえば、「しし鹿の谷事件」についてみる。これは平氏一門と院政勢力との衝突抗争であるが、その語りは、まず大納言成親は平氏が榮えていて出世できぬため西光はますます成りあがって威勢を振いたため俊寛は寺院での権勢をいっそうたかめたいためというそれぞれの意志と願望に基いての平氏打倒の企て、法皇の同調、鹿の谷山荘の密議にはじまり（事件の発端）、多田行綱の密告によるその露顯、西光や成親の捕縛、その前で清盛の強烈な行為と感情の爆発になり（事件の衝突）、清盛の苛烈な断罪と重盛の諫止、成親の遠流と惨殺、俊寛・成経・康頼の鬼界島流罪（事件の終末）というようになっていく。物語を進行し展開させてゆく主人公はこの発端から衝突をへて結末へ進む「事件」そのものであって、この事件のなかで諸人物が寄ってたかって自己の個人的社会的本質を発現しあっているところが、『平家物語』の世界である。たとえば、事件の衝突のところでは、こうなっている。成親は捕えられ清盛の邸の一間におしこめられ、「汗水になりつつ」一体誰が密告したんだ、どいつだろうとそればかり考え、足音がするといよいよ武士が殺しにきたのかと怯気立つ。清盛は激昂し勢い込んで「自ら板敷高らかに踏鳴し、大納言の坐ける後の障子を、さとあけ」ものいわず睨みつける。それから、恩を知らぬお前は畜生にも劣る奴だと罵る。それからやっと、陰謀の仔細を承わろうと聞き直る。成親は全くそういうことはない、誰かの讒言だからよくよく調べてくれという。「入道言せも果す、『人やある、人やある』と」貞能をよび西光の白状書をもってこさせ、「是を取て二三返押返々々読みみかせ、『あなにくや、此上は何と陳すべき』とて、大納言の顔にさと投かけ、障子をちやうとたててぞ出られける」（引用本文はすべて、山田孝雄校訂『平家物語』（岩波文庫）による。但し、若干の手を加えた。）ここには、成親と清盛の衝突抗争とおして、成親個人が持ちかねがその類型的典型であるところの当時の旧貴族が持っていた、思い切りの悪さ、怯懦、さいぎ心、厚顔等々の本性や、この弱さと穢さをうけ出しながら生に執着し命助かろうとする人間の本然が鮮明にみえてき、清盛個人とかれがその代表である平氏の現実主義的実力者の人間たちがもっていた、自己の意志と情熱に強

烈に生き直情的に直截公然と行動し感情する本性とその面白さが生々と視像化されている（小教訓）。だが『平家物語』は、こうした清盛と成親を語るがその終始を追求しないで、次には、清盛と重盛との葛藤とくに後者の思想と態度、また成経の助命に奔走する門脇宰相に移っている（少将を請」「教訓状」。この成経や宰相は事件の発端のところには全く登場させられていない人物である。さらに、事件の結末になり鬼界島に流された三人とくに俊寛が大きく見据えられる。かれらもまた、事件の衝突のところでは登場させられていなかった。そして俊寛がただ独り鬼界島にとり残されるところ、

纜ともつな解て押出せば、僧都綱に取附き、腰になり脇になり、長の立つまでは引かれて、長も及ばずなりければ、船に取附き、「さて如何に各、俊寛をば遂に捨果て給ふか。是程とこそ思はざりつれ。日來ひじょうの情も今は何ならず。只理をまげて乗せ給へ。せめては九国の地迄」と口説かれけれ共、都の御使如何にも叶ひ候まじとて、取附給へる手を引のけて、船は遂に漕出す。僧都せん方なさに渚なづみに上り、幼き者の乳母や母などを慕ふ様に足摺をして、「是乗せて行け、具して行け」と喚よめき叫べども、漕行船の習にて跡は白波ばかりなり。未だ遠からぬ船なれども、涙にくれて見えざりければ、僧都高き所に走りあがり、沖の方をぞ招きける。

ここには、生のみちを閉ざされときの人間の畏怖すべき姿が追真的に視像化されている。

こうして『平家物語』は、事件を主人公にし人物はその終始でなく他の意志や願望と衝突抗争して自己の本性をもっとも鮮明に暴露しているところだけを語る、そのことよって、実際におこった鹿の谷事件を土台にしその上に、清盛や成親や西光、重盛、俊寛たちがまったその個人的社会的意志と願望に生き自己の本性に生きているもっとも「真実な」群像の世界を創造する。このばあい、かれらは内乱の死生をかけた抗争をやっているから、『平家物語』のこの創造の世界は、当時における人間の生の驚異と畏怖、明るさと暗さ美しさと穢けがなさ等々が極限化されて見えるところであり、そのいみで、古代社会の閉塞をやぶって民族史が美しく伸びた治承・寿永の人間の世界をもっとも凝縮

し典型化したかたちで包括しているものなのである。

かかるものとして「鹿の谷事件」はまた、この物語においては、この事件がそのなかからうまれてきたところの当時の広大な現実を集中してゆくものになっている。すなわち、この鹿の谷事件を核とした外周には、このころ加賀の鶴川寺に起った紛争、それが忽ちに中央に波及し院と叡山の対立になり、山法師の神輿をかつぐ噉訴、座主明雲の流罪、それを途中で擁して奪いとり、かめ坊祐慶らの活躍という内乱前夜の情勢（鶴川軍）から「一行阿耨梨之沙汰」まで、平氏にとりいって立身出世した公卿の動き（徳大寺殿之沙汰）等々が豊富に語られている。

『平家物語』の作品の世界を具体的ににつくり展開させてゆくものは、この鹿の谷事件のような、平氏と諸他勢力との衝突と抗争がうみ出す事件であって、その主要なものが平氏と院政勢力との抗争の鹿の谷事件（治承元年）――平氏と畿内の名主的武士および寺院の連合勢力とが戦う以仁王拳兵（治承四年）――義仲の武士団の進撃と平氏都落（寿永一・二年）――義仲軍と義経軍との戦いを含む、平氏と義経の軍団との一の谷合戦（寿永三年）――同じく屋島・壇の浦合戦（文治元年）である。これら一つ一つの事件は、基本的にはいまみてきた鹿の谷のばあいと同じく、その事件のなかで自己の個人的社会的本質に生きている諸人物のゆたかな姿とそれがみせる新しい人間生の可能との凝縮化典型化せられた包括的集中像になり、その外周にさまざまな事象を纏い附かせることによってそれぞれの時点における広大な現実そのものを透けてみえさせるものになっている。それが自ずと、人間の世界はかくも面白さと悲しさに充ちた場であり、その興味と不思議の魅力の一切は諸個人諸集団の異なる意志と願望の闘争から流れ出てくるものであることを、教えるのである。

このばあい『平家物語』の、鹿の谷の語りでみたように事件を主人公にし個々の人物はその生き方の終始や性格の全面でなくそのもっとも特徴的本質的な断面だけを捉えその多様豊富な群像によって現実のゆたかさを反映するという方法は、『今昔物語』が一個または少数の人物でなく驚くべく多様な人間生活の断片を語りその集成によって現実の

豊饒をあらわしているのと、大きく共通する面をもっている。それはこの物語の享受者が、すでに触れた如く十一世紀に既に平安朝社会の閉塞からはみ出すように現世の有意味に大きく開眼し『今昔物語』をも所産した人びとの正常な後裔でありその発展者だったからである。³⁾しかし今昔では、多様な人間生活は断片的個別的に諸階層間の連関や相互脈絡を抜きにして語られ、貴族は貴族、武士は武士、庶民は庶民として別々の巻に分断し纏めて収録され、現実も「今ハ昔」というように過去と現在(したがって未来は同質の延長線にある非現状変革的な態度でみられている。そのいみでこれはまさしく、最初にのべたような平安朝的世界のなかの所産だといえる。しかし『平家物語』では、諸人物はみな意志と願望の衝突をとおして他の個人集団階層と不可分離にかかわりあっている存在として、現実も想像もしえなかった出来事が湧きおこってくる変革的な世界として見据えられている。この大きな発展もしくは飛躍は、古代社会の秩序と体制の閉塞から解放されてゆくたかいた社会や人間の可能性にたいする現実主義的想像力と感覚の伸張を、十一世紀始めの平安朝においてでなく十二・三世紀の内乱という革命的な状況のなかで貫いたところに達成せられた。この新しい人間観社会観はそれに応じた新しい文学の方法と形式を要求する。それがこの物語の、説話文学の方法を継承しつつそれを超えた叙事詩的方法と形式であった。

註

1 有王や僧兵の『語り』が早くからおこなわれていたことについては、柳田国男「有王と俊寛僧都」『物語と語り物』昭和二十一年 角川書店、拙稿『平家物語の形成と本質』(日本文学協会編『日本文学の遺産』昭和二十七年 岩波書店)を参看。

2 原作『平家物語』にかんする『徒然草』の記事は、かなりに信憑せられるものと思う。たとえば、『徒然草』は慈鎮が一芸あるものを扶持し行長もそのひとりだったと記すが、この慈鎮の行跡は「大機法院衆々起請事」によって確証せられる(筑土鈴寛『復古と叙事詩』昭和十七年 青磁社)。また『徒然草』が指摘する原作平家と比叡山とのふかい関係も、平曲の曲詞が天台の声明にもとづき、平家琵琶も盲人だけに許された四弦琵琶の名残をとどめていることから傍証せられる(渥美かをる『語り物

の研究」『文学』昭和二十八年二月。

- 3 『平家物語』と『今昔物語』をふくむ説話の営為との密接な関係を指摘したものに、阪口玄章『平家物語の説話的考察』（昭和十八年 昭森社）、拙稿『平家物語と民衆』（『文学』昭和二十八年二月）、西尾光一「平家物語における文学的人間像の成立」（『同』昭和二十八年九月）、永積安明「今昔物語集の課題」（『中世文学の展望』所収）などがある。

二

こうして『平家物語』は、諸人物が意志と願望を衝突させあってつくり出す事件のなかに当時のおどろくべき人間の生的一切を包括し、これら諸事件の連鎖によって、平安朝的世界にとってかわって出現してくる新しい広大な現実をそのゆたかさのままに造型してゆく。とともに、そこに次第に現前してくる平氏一門のほろびを熱い目で見入りながら、この諸人間が自己の願望と期待を生かそうと根かぎり力かぎり生き抜いたその奮闘は、誰も願わず期待していなかった事象をうみ出すことになるという人間の歴史のふかい真実を語り、それをしかあらしめてゆくところの歴史と人間の深淵に存在し個々人の意志と願望を超えて働く「無常」の力を、裸形のように見えさせてゆくのである。

既に見たように、この内乱は古代社会に満たされぬ無数の人びとのさまざまな力が燃りあわさって起った。この力に押されて、貴族も武士も名主も否応なく新しい中世的土地所有者に転化しようとしその覇権をめぐる血みどろに戦わねばならなかった。そこに諸人物は自分の本性をさらけ出し、人間生の一切を見えさせたのであるが、このような激しい抗争の時代では、諸個人は生き残るためにはどうしても強い集団組織に繋がらねばならなかった。そしてこの内乱において諸階層がそれを目ざして血みどろに戦った中世的土地所有とは、唯一の、最高究局の土地所有権の存在しか許さぬ封建制であった。したがって頼朝の権力だけが優越するのであり、その前に義仲も義経も排除抹殺され

るよりほかなかった。まして、莊園領主の平氏一門は徹底的に、根こそぎに断絶させられねばならなかった。平氏の重衡しげらや維盛きせいや六代むくだい、建礼門院たちは、平氏という集団のひとりとしてでなければ激しい内乱のなかに生きておれず、だがこの平氏という集団のきり離せぬ一員である限り、かれらがどんなに「生」を欲しようとも、戦場での討死を免れても、個人としては美質に富み悪を犯さず悲惨に終命すべき個人的責任はないにもかかわらず、草の根わけても探し出され一寸刻みのようにその生を奪われるよりほかない。それを殺す頼朝以下の武士たちも、個人としては重衡たちの悲惨な最後をよろこび欲する意志と願望を持つてはいなかった。『平家物語』自身が語っているように、頼朝は自発的に重衡や維盛を殺そうとしなかった、むしろその命を助けてやりたかったのである。六代を首斬ろうとした北条四郎ら幾百の武士も、個人としては六代を助けたかったし、後白河法皇も建礼門院の悲惨な末路を欲し期待したのではない。だが、かれらが領主階級という集団のひとりである限り、その個人的意志を超えて、平氏悉くを抵抗力を喪った後も草の根わけて探し出し殺さねばならなかった。法皇も、女院の悲惨な末路をどうすることもできなかった。このように治承・寿永の内乱現実には、おそろしく鮮明に、それぞれの人間が自らの個人的願望と期待を生かそうがために精一杯奮闘したにもかかわらず誰も自発的に欲せず期待しなかった(重衡たちをこの上ない悲惨に殺すという)事象をうみ出してしまったという歴史の悲劇、内乱ゆえに個々人は強く集団に生きねばならずそれだから個々人お互いの死にたくない殺したくないという最低の人間の願望さえも相殺しあわねばならなかったという悲劇を、うち出していた。

ところで、この内乱時代に生きたたかったのは、永いあいだかかって古代文化を創り出し蓄積したその古代の成果を背負っている民族であるが、この成果をうけつぐ人びとのなかでは、まだ未開と野蠻の面影をのこす古代叙事詩的神話的季節は過ぎていた。戦いに勝利を占めた集団が、戦場で敵を斃すのならともかく、戦いが終わった後でも無力になり抵抗力をうしなった個人的美質の所有者を草の根わけても捜し出し一寸刻みのように生を奪うのまでも、人間

の力の偉大な發揮として讚美し謳歌しうる段階は過ぎていた。それは、武士を含めて当時の民族全体のものであった（頼朝たちもそうであることは、いま触れた通りである）。古代末いらい流布した仏教が、この思想と感情をいっそう育てひろめていたのであり、時代はすでに中世的宗教的季節に入りはじめていた。まして、下級貴族的な『平家物語』の作者は、貴族社会で発達した個人意識、それと結びつく仏教的なもの、文芸や芸術の尊重、男女や肉親のあいだの愛情の貴重視等々の平安朝貴族文化の成果をずっしりと担っており、貴族的人間の美質やそれを持つ人物が生を奪われるときの悲しみを自分の血肉をかよわせて理解することができた。また、集団と個人の問題をもふかくうけとめることができた。それだけにかれらには、治承・寿永の現実がうみ出した平氏悉くのほろび特に重衡、維盛、六代、女院たち個人の悲惨な最後とそれが集中的に表わしている前記の歴史と人間の本源の悲劇が抜き差しならぬ圧倒性をもって、心魂を揺さぶって語らずには済まされぬ問題性と激情をもって、迫ってきたのである。そこに、『平家物語』における平氏誰れかれの末路の、哀切をきわめた悲劇の物語が大きく語られてくるのである。

維盛の最後をみる。かれは平氏一門への義理をまもうとする一方の心と相剋しつつ、今ひと目妻子を見ようと屋島を脱出する。かれはやはり、故郷の妻子がいるこの世の生を欲して欲してならないのである。だがそれはかなわず、再会をこがれる心を抑えて熊野三山に参詣し、那智なちの沖に漕ぎ出、そこで身を投げようとする。滝口入道も、主の維盛に最後まで供をしようとする兵衛入道や石童丸、舍人武里とねりたけざとも同舟し、山なりの島に漕ぎよせる。維盛はその島の松の幹を削り、この世の形見に銘跡を書きつける。

祖父太政大臣平朝臣清盛公法名浄海 親父内大臣左大将重盛公法名浄蓮 其子三位中将維盛法名浄円 生年二十
七歳 寿永二年三月廿八日 那智の沖にて入水す

この記銘を後に、いよいよ入水しようとして沖に漕ぎ出る。それをおし包んで、かつてなく有情な自然があらわれ、「海路遙に霞渡り」沖の釣舟の「浪に消入る様に覚ゆるが」さすが沈みもやらず「一列引連れて今はと帰る雁がねの、

越路をさして啼行く」のも維盛の慕情をかきたてるのである。維盛は念仏して心を鎮めようとするが、我が投身の知らせを故郷の妻子は何と聞かかと思ひ乱れ、「哀れ人の身に、妻子と云ふものをば持まじかりけるもの哉」と深い嘆息を洩らす。『平家物語』の作者たちは、この最後まで故郷の都と妻子を恋いる維盛の貴族的人間の愛情の美に撃たれ、この世に生きていたいと悶える心の熱さに衷心から同感し、にもかかわらずその願いが空しく刻々と生を奪われ死に近づいてゆくのに胸を衝かれていたのである。しかし維盛は死ぬよりほかないのであり、それはさきにみたような歴史と人間の根源にある悲劇であった。この悲劇は、いわば神のみが解決しうるものであり、そして作者たちは仏教を信じる中世に入っているゆえに、以下、維盛を滝口入道の朗々たる説法の声のなかに包んでゆき、かれが仏を信じ来世を信じて「忽に妄念を翻^{ひるがへ}して西に向ひ手を合せ、高^{かう}声に念仏百遍^{ひゃくへん}計唱^{けいしょう}へつつ、南無と唱る声ともに海にぞ入給ひける」、兵衛入道も石童丸もその跡を追って入水したと語る。そしてこの悲しみの強烈な感銘を、三人を呑みこんだ海面を滝口入道が凝然と見つめ我れ知らず読経と念仏を口ずさむ、しかし「さる程に、夕陽西に傾き海上も闇くなりければ、名残は尽せず思へども、空しき船を漕帰る」、その舟中で「とわたる舟の櫂^{しやく}の滴^{てき}、聖が袖より伝ふ涙、わきて何れも見え」なかったという語りで、収束し、あとで、この維盛の入水を聞いた頼朝が「哀れ隔^{へだて}なう打向ておはしたらば、命ばかりは助奉てまし……まして出家などせられなん上は、仔細にや及ぶべき」と嘆いたと、つけ加える（藤戸）。頼朝も、個人としては維盛を入水して果てさせようという願望と意志をもたず、命を助けたいと欲した。しかしその個人的願望を、内乱のなかでは否定せられるよりほかなかったのである。

重衡、六代、女院の終命も、ほぼ同じように語られている。かれらも個人としては悲惨に死ぬべき悪を犯さず、みなこの世に生きることを愛し欲した人たちである。重衡は生捕られ鎌倉へ送られるそのどたん場でも内裏女房との東の間の再会に心を然やし鎌倉到着後武士の邸に籠められながらも^{せんじゆ}千手の前と詩歌管弦を唱和するという、最後までこの世の愛と風雅と情けを捨てぬ人であり、女院も大原の寂光院に入りながら安心立命でなく現世の戦乱で果てた愛児

をはじめ多くの近親への追慕に身をさいなむ人である。かれらをとしまく、重衡における内裏女房・千手・木工右馬むくうま允知よし時ときたち、六代における母・乳母・斎藤五と六という郎党ら、女院における阿波内侍たちも、だれひとりとしてその死を欲してはいない。かれらを悲惨な死に追ひこんだ武士たちも、頼朝は重衡に私怨は全くないといい狩野介宗茂も心を尽してもてなし、六代にたいして北条四郎たちは誰も斬り手にならずひたすら文覚の助命を待ち、法皇も女院を慰めにはるばる大原の奥に行幸した。にもかかわらず、誰も欲せず期待せぬ悲劇的最後は現実にうまれてしまうのであり、何人もそれをおしとどめることはできないのである。

このように、平氏の誰れかれはそれぞれ美質をもちこの世に生きていたくてならなかった、個人としては悪業を犯さず悲惨に落命すべき責任はなかった、その近親者はこぞってかれらを護ろうとした、頼朝以下の武士たちも法皇もその最後を欲し期待する個人的意志や願望をもたなかった、にもかかわらず現実に平氏悉くの非情な滅亡がおこったとすれば、作者たちはどうしても、この内乱を動かし重衡たちや近親者や武士も法皇も含む一切の人間の個人的意志と願望をこえて働く一つの巨大な力の存在を、想定しなければならず、平氏たちは(源氏の武士によって)亡ぼされたのでなくこの大きな力に働きかけられて亡びたのだという考えを抱かねばならなかった。この歴史と人間の深淵に存し一切の個人の意志と願望をこえた力を、かれらは中世的に「無常」というイデーで捉えたのであった。『平家物語』は、このように作者たちが、平氏の滅亡という現実の事件のなかに深い悲劇と圧倒的な問題性を発見し、歴史と人間の深淵を見てしまったという激動に包まれ、それを自己の同類の総て(人類)に訴え語らずにはいられなくなったところ、そのモチーフがあった。それだから、『平家物語』は、「祇園精舎の鐘の声、諸行無常の響あり……」という万感こめた語りにはいじまり、「灌頂かんじょう巻」における建礼門院の往生のほとんど宗教的な感銘をもって終るものになり、このような感動を全篇に貫流させるものになったのである。このように作者が、平氏悉くのほろびという事象のなにかかる深い感動と問題をうけとったから平氏一門の運命の終始を仔細に追求せずにはいられなかったのであり、それ

ゆえにまた、この平氏の悲劇をうみ出してくる治承・寿永の内乱の広大な現実、そこにおける諸個人諸集団諸階層が互に意志と情熱をあげて抗争する如実な姿を見ようとせずにはいられなかったのである。そこに、われわれが既に「鹿の谷事件」についてみたような、諸人物がその個人的社会的意志と願望を発揮しつつ躍動的に生きているゆたかな群像的造型世界が創られてき、こうしたゆたかな造型の像をつぎつぎに以仁王^{もろのとう}挙兵、一の谷合戦、壇の浦合戦等々としてつくり出し連鎖させてゆくこの物語の叙事詩的世界のうみ出しがあった。それが自ずと、この内乱がみせた人間生の面白さと悲しさ、驚異と畏怖、美と醜をもっと明確なかたちで知りたい、その一切をつつみもつ広大な現実の全体を知りたい、それを知ることでの現世の人間の世界が限りない興味と測りがたい問題に充ちておりそれだけに尽きぬ生き甲斐があることを確認したいと欲していたところの、すでに十一世紀の始めから鎌倉時代にわたって古代社会の閉塞から解かれ続け人間生の有意味や社会と人間の可能性の現実的想像と感覚をたかめ続けてきた人びとの欲求に、こたえたことであつた。

この物語における、新しい武士たちの歴史とその人間内容の、豊饒と秩序、具象と展望をあわせもつ見事な表現も、そのようにしてうまれたものだった。

実際、『平家物語』は、平氏一門との激しい抗争のなかに治承・寿永期の武士たちを投げ入れ、かれらがこの状況のなかで自己の意志と情熱を鮮明な行動としてあらわすその視像によって、この内乱のなかで美しく伸びひろがってゆく再び新たな(中世領主制の)權威秩序に組み込まれてゆく武士たちの歴史の運命を、適確な見透しと生々とした具象性とをもつて語っている。たとえば、木曾義仲が信濃で挙兵し北陸路を席卷しながら嵐の如く都へ進撃するところは、武士の棟梁義仲とその軍団はまったく一体となり、義仲個人は殆んど完全に集団のなかに融けこまされて語られている。このように一方では、武士団の鞏固な集団性の描出がある。他方には、群小武士のつよい主体性とそのゆたかかダイナミックな生の描出がある。たとえば「宇治川先陣」では、佐々木高綱は頼朝以下大名小名の居並ぶ前で自分が